

2013 Annual Report

神戸大学大学院農学研究科地域連携センター
平成25年度 活動報告書

Contents

はじめに	1
平成25年度事業内容	1
Ⅰ 地域共同研究	2
Ⅱ 地域交流活動	4
Ⅲ 相談情報発信	9
組織体制	10

地域共同研究

はじめに

■ ごあいさつ

地域連携センター長 高田 理

農学研究科地域連携センターは、大学が保有する知識や技術を農山村地域の問題解決に活用し、地域社会の発展に貢献することを目的として、平成15年に創設されました。主に次の3つの活動を実施しています。1つは、地域共同研究です。地域が直面している食料・農業・農村問題を解決し、地域がより発展するための調査研究を自治体、NPO、住民などと共同で進めています。2つは、地域交流活動です。フォーラムやワークショップ、学習会などの開催を通じて、地域と農学研究科、本センターとが相互理解するとともに、知識を共有し、地域の発展につながる活動をしています。また、地域との交流を通じた実践型の学生教育にも取り組んでいます。3つは、相談・情報発信活動です。農学研究科と地域をつなぐ窓口として、共同研究や地域の問題に関する相談に応えるなど、研究や活動における事務局業務をしています。ま

た、ホームページなどを通して、最新の情報を発信しています。

平成19年に農学研究科と篠山市との間で地域連携協定が締結され、さらに平成22年には、これまでの連携協定を発展させ、全学を対象とした大学協定が締結されました。平成18年に開設された篠山フィールドステーションを拠点に、本センターが中心となって全研究科・学部と篠山市とこれまで以上の地域連携活動を展開しています。(なお、これらの活動をしていくために、篠山市から財政支援も受けています。)

前述の活動は主に篠山市と行われていますが、篠山市以外にも、本センターが認定、助成したサポート事業もあります。本『活動報告書』は、平成25年度に本センターが実施したこれらの活動を取りまとめたもので、本センターの活動の理解を深めていただく一助となるとともに、地域の発展に役立てば幸いです。

平成25年度の事業内容

I 地域共同研究事業

地域のニーズや農学部のシーズに基づき共同での調査研究をおこなう。

II 地域交流活動事業

地域と農学部で知を共有し、実践活動をおこなう。

- 1) 地域連携研究会(A-Launch)の開催
- 2) 農産物直売所を通じた、生産から販売までのプロセス体験機会の提供
- 3) 学生地域活動サポート事業
- 4) 農村地域学習ネットワークの構築
- 5) 福住地区まちづくり計画策定への参加
- 6) 宿泊型学習拠点の整備
- 7) 農村ボランティアバンクKOB(ノラバ)の運営支援
- 8) 講演

III 相談・情報発信事業

地域と農学部を繋ぐ窓口として、情報の受発信をおこない各種相談に応じる。

- 1) ホームページ等による情報発信
- 2) オフィスアワーの実施
- 3) オープンキャンパスへの参加

地域のニーズや農学部のシーズに基づき共同での調査研究を推進している。平成16年より、地域自治体や住民団体、NPO、協同組合等と協働で実施し、地域発展に寄与する研究を、農学研究科地域連携センター共同研究として認定、実施している。

1 失われつつある遺伝資源を利用する事で保全する:よみがえる梨遺伝資源「イワテヤマナシ」 片山寛則・布施未恵子/ささらい



現在日本で流通している梨のほとんどは「20世紀ナシ」を交配親として改良されたものである。このため遺伝的に偏りが生じ、品種改良が困難であったり、病気への抵抗性が低下したりする可能性がある。こうした問題を解決するため、現在流通している梨が持っていない

い機能を持つ、東北地方に自生する野生梨「イワテヤマナシ」を食資源教育研究センターのジーンバンクで保存している。現在30種類のヤマナシを試験栽培しており、ジャム・和菓子などの商品化が進んでいるが、香りを生かした商品の開発が不十分である。結実量が多く、香りの高い系統を使って、篠山市で地域の食材を使った料理を提供している「ささらい」とともに、新たな商品を開発し、ヤマナシの利用可能性を探った。その結果、ジェラートとしての加工が本品種に適していることが明らかになった。新たな加工先と合わせて、商品化に向けて試験を続ける予定である。

2 里山林を健康的に維持させる管理手法の実践的研究 黒田慶子・庄司浩一



里山林を健康的に持続させるには、住民が里山林の現状を理解し、里山資源を利活用して森林資源を循環させる仕組みを考えることが大切である。そこで、篠山市内の個人農家の所有する森林(広葉樹二次林)において、植生調査、ナラ枯れの被害調査など森林の現状調査をおこなった。調査林分は昔は薪炭林

として使われていた林である。今年の夏には約8割の落葉ナラ類(コナラ、アベマキ)にカシノガキクイムシの穿入があり、大径木の被害が目立った。また、林床には高木種の後継樹(芽生え)が生育しておらず、里山の次世代の更新がおこなわれていないことがわかった。そこで、薪として利活用するための伐採実験を通して、薪として利用できる資源が豊富であることを所有者に認識してもらった。また、シカの被害により下層植生がほとんど消失していることから、伐採木の株からの萌芽更新を成功させるにはシカ害の防除を確実に実施する必要があることが明らかになった。

3 農業水利構造物の維持管理と地域資源としての活用 ~淡山疎水・東播用水未来遺産運動計画~ 松本文子/淡山疎水・東播用水未来遺産運動検討委員会/東播用水土地改良区



淡山疎水・東播用水は神戸市北区・西区、明石市、加古川市、三木市、稲美町を受益地とする広大な水利ネットワークである。特に淡山疎水は江戸時代から構想・整備が進められた歴史的経緯を持つことが特徴である。当該地域では、用水設備のみならず地域の人々が育んできた水環境を長期的に活用すべく、東播用水土地改良区が

主体となり、2013年に淡山疎水・東播用水未来遺産運動検討委員会が設置された。本共同研究では、当該地域の空間情報を地理情報システム(GIS)上で整理し、それに基づいて運動に対する住民参加を促進する手法を開発することを目的とする。本年度は、農業に関わるデータベースである水土里情報、国勢調査等の位置情報データを組み合わせ、当該地域に関わる空間統計をGISによって視覚化して議論の参考情報として提示するとともに、意識変化のシミュレーションを行った。次年度は具体的な活動の開始に合わせて意識変化を調査するため、東播用水土地改良区からの支援を受けて研究を継続予定である。

4 加西市における地域自治組織運営に関する研究
山口創・中塚雅也



本研究は兵庫県加西市を対象に、近年、地域づくりの主体として期待され、主に小学校区を範囲として設立されている地域自治組織が抱えている運営上の課題や支援課題を探ることを目的に取組んだ。加西市に設立され

ている4つの地域自治組織の会長に2013年7月から2014年1月にかけて聞き取り調査をおこなった結果、組織活動のマンネリ化やコアメンバー以外の活動参加が少ない、一部のメンバーに負担が集中しているといった運営上の課題があることが明らかになった。またこうした課題を受けて、「リーダー間で情報交換や相談をし合える場の形成」、「組織のマネジメントに関して専門知を獲得できる機会を設ける」等の支援が必要と考えられた。

5 鳥獣害を軽減し地域に活力をうみだす獣害対策に関する研究
布施未恵子／鈴木克哉(兵庫県立大学)／篠山市農都整備課



近年、サルの出没による食害・家屋損壊などの問題があとを絶たない。そうしたサルの出没には、集落の放棄野菜や未利用の果樹などによる誘引が少なからず影響していると考えられている。そこで、放棄果樹や未利用の果実を積極的に収穫し、活用する取組が日本各地でおこなわれている。そうした取組は、一集落が受入れる事例が多いが、サ

ル出没は複数集落に及ぶため、対策活動も複数集落が単位であることが望ましいが、その体制づくりは容易ではない。本研究では、複数集落で柿とりイベントを実施した篠山市の事例に着目し、イベント実施までの組織体制やプロセスを明らかにした。イベントで柿を大量に収穫した結果、サルの出没には変化はなく、むしろ増加傾向にあった。だが、地域側は、不要柿のニーズに気づき、かつ、次年度はサルの出没を軽減させる収穫方法に改変したイベント開催を検討するなど、このイベントが複数集落での対策意欲の向上に関係している可能性が明らかになった。

※本事業は、平成25年度兵庫県地域再生応援事業の一部助成を受けて行われた。

6 地域コミュニティと連携した「創造農村ラボラトリー」の創出
野口陽平・伊藤一幸・中塚雅也・鈴木武志・布施未恵子／高嶋正晴(立命館大学)



「創造農村」推進のための放棄田整備、地域住民との情報共有活性化、大学連携の強化を目的とし、篠山市の古民家を改修し地域コミュニティとのハブとなる滞

在型拠点づくりを行った。古民家改修は10月26日から11月29日にかけて地元職人に弟子入りするというワークショップ形式で行われ、のべ100人以上の参加者があった。またコミュニティビジネス創出のワークショップも2回開催した。その他、在来種栽培に向けた休耕田の整備、拠点利用による正課・課外活動等での学生の地域滞在促進も行われた。

※本事業は、平成25年度総務省「域学連携」実践拠点形成モデル実証事業の助成を受けて行われた。

II 地域交流活動

1) 地域連携研究会(A-Launch)の開催

平成24年度より、昼休みの時間をつかった地域連携トークイベント「A-Launch」を開催している。これは、これまでセミナー形式にて開催してきた「地域連携研究会」を、より気軽に、幅広く、地域での実践活動や農学の先端研究・理論に触れる場として展開したものであり、今年度は4回開催し、約75人が参加した。第5回では、イワテヤマナシを加工したジャムの試食や、第8回では、吉田先生の所属する食資源教育研究センターで栽培するバレイショの試食なども合わせておこなった。分野横断型の気軽な交流の場として、今後も新たな教員を招き多様なテーマの話題提供を進めていきたいと考えている。



表1 A-Launch 実施の概要

日時	テーマ	話題提供者
第5回 4/18	失われつつある遺伝資源を利用することで保全する～よみがえる梨遺伝資源「イワテヤマナシ」～	片山寛則 (神戸大学農学研究科 食資源教育研究センター)
第6回 7/19	大学の地域連携の到達点と展望	内平隆之 (兵庫県立大環境人間学部 IC・ヒューマ地域連携センター)
第7回 10/24	佐渡でふれあういのちのつながりがり～人とトキが暮らす島を孫の世代へ～	星信彦 (神戸大学農学研究科 応用動物学)
第8回 1/20	サクラソウ咲く景色をふたたび～守るために、知ること・伝えていくことの大切さ～	吉田康子 (神戸大学農学研究科 食資源 教育研究センター)

2) 農産物直売所を通じた、生産から販売までのプロセス体験機会の提供

今年度10月より農学部キャンパス内で農産物直売会「小さな直売所」にて、地域連携活動に関わる農産物・加工品の販売を開始した。地域連携センターでは、この直売所の売り場づくりや販売のプロモーションなどの支援をおこなっている。直売所設置の目的は、学生へ実践的な教育機会を提供すること、および、農学部内での地域連携活動の理解や関心を得ることが挙げられる。12月までに昼休みに4回開催し、学生活動団体と農業実習により育てた黒豆枝豆、米およびもち米、加工品としては餅の販売支援をおこなった。今後は月1回の定例開催を目標とし、学生に限らず広く農学部内の連携活動に関する農産物の販売支援およびPR活動を続ける。



3) 学生地域活動サポート事業



状況を把握し、学生団体の抱える課題に対するきめ細かな支援体制を整えるために、各団体の代表者から構成される、「篠山学生活動連絡協議会」(通称さされん)の設立を支援した。本協議会では月に一度、定例ミーティングを開き、各団体の活動や課題の報告をおこなっている。連携センタースタッフもこの協議会に参加することで、学生団体の潜在的な要望を汲み取る事ができ、農産物直売所の開催などの支援に至った。

さらに、学生団体は合同で、大学祭の一環で年に1回開催される徹夜祭(11/9~10)にて、篠山の食材や日本酒を提供する1日だけのレストラン「ささやま家」をオープンした。「ささやま家」には多くの学生や一般の方が訪れていたほか、篠山市真南条上や福住地区の住民も訪れるなど、盛況であった。このように、学生団体の活動は、地域に留まらず、六甲などの都市部への情報発信としても機能し始めている。

昨年度より学生の地域連携活動をサポートする「学生地域活動サポート事業」を開始した。この事業の目的は、農学部・農学研究科学生の地域の課題解決・価値創造につながる協働活動のサポートである。今年度のサポート事業の対象活動は、食農コープ教育の履修を契機に発足した、篠山で地域活動を行う4つの学生団体の各取組みである(表2)。また、各団体の現

況を把握し、学生団体の抱える課題に対するきめ細かな支援体制を整えるために、各団体の代表者から構成される、「篠山学生活動連絡協議会」(通称さされん)の設立を支援した。本協議会では月に一度、定例ミーティングを開き、各団体の活動や課題の報告をおこなっている。連携センタースタッフもこの協議会に参加することで、学生団体の潜在的な要望を汲み取る事ができ、農産物直売所の開催などの支援に至った。

表2 学生活動団体の概要

活動団体名	ささやまファン倶楽部	ユース六篠	はたもり	にしき恋
設立年度	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度
会員数	9	10	35	41
活動地域	真南条上集落	福住地区	畑地区	西紀南地区
代表者(所属)	菅原将太(経済3回)	橋田薫(発達3回)	森田綾子(農3回)	上田羊介(農2回)
顧問	中塚雅也	宇野雄一	鈴木武志	杵本敏男
活動頻度	1回/月	適宜	適宜	1回/週
定期活動	由利山の整備 地域イベント参加	行事の運営補助 地域拠点での駐在	行事の運営補助 農作業補助	農作業とその補助 行事の運営補助
H25年度主要活動	由利山整備 里山祭りへの参加	地域イベント参加 福住まちづくり計画への参加	畑祭りへの参加 黒豆栽培	にしき恋畑の維持 農作業補助 他大学との交流



① ささやまファン倶楽部

平成21年度から真南条上営農組合を受け入れ窓口として活動している。昨年度と同様、定例活動として月に一回、基本的に人手が必要とされている里山整備を行っている。また、自治会や営農組合が主催する「里山祭り」や「真南条上を考える会」、「敬老会」などに参加し、地域交流や、地域活動に学生として参加している。農村の魅力や都会に伝えるために、神戸大学生だけでなく他大学や一般の方の活動への参加も歓迎している。



② ユース六篠

今年は、福住地区まちづくり計画の策定に向けた委員会に参画した。今まで特にお世話になっていた方々以外の福住の住民の方と交流できたほか、地域の方々の、まちづくりに対する思いに触れることができたことは、私たちにとって大きな学びだった。また、鳳鳴高校や立命館大学の方々との福住地区での交流も、まちづくりを考えるうえで刺激となった。今後は、2030プロジェクトの活動支援に加えて、計画に基づいたまちづくりを、住民とともに実践したい。



③ はたもり

平成23年度から畑地区みたけの里協議会を窓口として活動している。昨年度と同様、高齢化と少子化で規模が縮小し、存続が危ぶまれている「はた祭り」に参加した。今年度は、はたもりのメンバーだけでなく、他団体や下級生も参加する形で行った。また、昨年度まで受け入れの中心としてお世話になっていた故北山貞夫さんの畑を、地域の方と協力して維持管理した。これらの活動を通して、ボランティアを地域で行うのではなく、地域から自分たちが学ぶこと、また地域の人に影響することを大切にしている。



④ にしき恋

平成24年度から西紀南地区まちづくり協議会を窓口として活動している。主に、西紀南地区の農家宅へ農作業を手伝いに行く形で、西紀南地区の住民の皆さんとの繋がりを深めた。また地区住民の方から借りた畑で、農作物の生産から販売までを行った。販売活動は全国の農業系サークルと交流の機会にもなり、かつ、西紀南地区の宣伝の場ともなった。今後はこうしてできた繋がりをより深めていきたい。

4) 農の学び場 Rural Learning Network

丹波をはじめ北近畿を中心とした農村地域の学習の場づくりとして、平成24年度から農村地域学習ネットワークを構築し、運営を支援している。このネットワークは、1) 地域の問題や取組実態の理解、2) 先進的・革新的な取組や技術の共有、3) セクターと地域を越えたネットワークづくり、4) 現場発の政策、事業、

研究の形成、の場となることを目的としている。特徴として、複数の組織からなる編集委員のもと、運営事務局が実務的な企画運営を担っている。平成25年度は、農村地域で活躍する女性や若手に焦点をあて、計5回のセミナーを実施した(表3)。

表3 セミナーの内容

日時	テーマ	話題提供者 (所属)
第9回 6/22	女性が輝く地域づくり：むらで仕事を作り楽しむコツを考える	上垣 美由紀 (女性農業者グループ「七つぶの種」, わはは牧場)
第10回 8/31	地域の種をつくる：在来種を探し・守り・活かすには？	伊藤 一幸 (神戸大学農学部) 中塚 華奈 (NPO法人食と農の研究所)
第11回 10/23	“最先端”をめざす若者たち：なぜ田舎で働き出すのか (元町カフェとのコラボ)	井口 元 (起業支援型シェアハウス「みんなの家」) 藤本 傑士 (エコタウン地域作り集団「大路未来会議」) 湯山 加奈子 (地域づくり会社「株式会社ご近所」)
第12回 2/1	獣害対策を市域資源にかえるコミュニティづくりとは？	鈴木克哉 (兵庫県森林動物研究センター) 布施未恵子 (神戸大学農学部)
第13回 3/2	農村技術の伝承：どのように学び、育てるのか	松本智翔 (ヘリテージマネージャー/住職)・ 三木宏祐 (茅葺き職人)・道法正徳 (奇跡の剪定師) ・岡村康平 (ありがとんぼ農園)

△編集委員：金野幸雄(一般社団法人ノオト代表)・小橋昭彦(NPO法人情報社会生活研究所代表)・高嶋正晴(立命館大学准教授)・西村いつき(兵庫県)・馬袋真紀(朝来市)

△運営事務局：中塚雅也(神戸大学農学研究科)・内平隆之(兵庫県立大・エコヒューマン連携センター)・高嶋正晴(立命館大学)・竹見聖司(篠山市)・出町慎(関西大学・佐治スタジオ)・布施未恵子・野口陽介(ともに神戸大学篠山フィールドステーション)

5) 福住地区まちづくり計画策定への参画

篠山市福住地区ではまちづくり協議会において、兵庫県、篠山市、神戸大学の協力のもとで、概ね1ヶ月に1回の実行委員会を開催し、「福住地区まちづくり計画」の策定が進められてきた。そのワーキンググループに地域連携センターより中塚雅也准教授と学生7名が参画した。まちづくり計画に関する情報を、広く共有するために、話し合った内容と9/22に開催したワークショップ「カフェ&バー」の様子をまとめた動画を作成し、次の回のワーキングに上映すると共に、まちづくり計画のFacebookページでも公開した。また計画の素案ができるまでの経過を共有するために、住民から出た意見を項目別にまとめたマインドマップを作成し、コミュニティセンターなど地区内数ヶ所に掲示



した。全戸アンケートの実施などを経て作成した計画案は、年度末に地域住民に向けて発表した。

6) 宿泊型学習拠点の改修

これまで、多数の学生団体が篠山市内で地域活動に参加してきたが、その際に宿泊可能な活動拠点を望む声があがっていた。そこで、平成25年度に、里の空き家活用事業の支援を受けて、中塚雅也准教授が中心となり、宿泊型学習拠点(福住フィールドフラット)を整備した。

整備後におこなわれた地域へのお披露目会には、50名を超える方の訪問があり、今後の活用について地域の理解を得た。



7) 農村ボランティアバンクKOB(ノラバ)の運営支援

平成26年2月14日現在、会員登録しているノラバイターは356名、そのうち新規登録者は20名であった。また登録農家は64軒と昨年より5軒増加した。ボランティアの実施状況本年度は、新規登録の篠山市の5軒を含む10軒の農家からの依頼募集があり、マッチング件数は35件で、昨年の21件から大きく増

加した。増加の要因としては、事務局運営に学生のノラバイター2名が携わったことや、登録農家数の増加により募集件数だけでなく、イベントなど幅広い内容の募集があったことが考えられる。今後は篠山市以外の農家の登録件数を増やすことにより、学生が実習地以外の農家に訪れる機会を提供していきたい。

表4 登録者数推移

	H23年度	H24年度	H25年度
学 生	118	115	127
一般市民	183	209	229
合 計	301	324	356



8) 各種講演会・話題提供

地域連携センターに関わる教員・スタッフが依頼された講演は次のものである。

日時	タイトル	開催団体	発表者名
11/1	サル被害からウスイエンドウを守る	JA 丹波ささやま	布施未恵子
12/10	サルから学んだこと	高齢者大学(篠山市中央公民館)	布施未恵子
12/10	兵庫県の鳥獣害対策	兵庫県農協青壮年本部協議会	布施未恵子
1/16	篠山市の鳥獣害対策	宇陀農業推進協議会	布施未恵子
2/7	農村でどのように生物多様性が守られるかー兵庫県篠山市の事例からー	都市と生物多様性研究会	布施未恵子
2/19	篠山で世界とつながる生き方を	兵庫県立篠山鳳鳴高等学校	布施未恵子

1) ホームページ等による情報発信

地域連携センターHP(<http://kobe-face.jp/renkei/>)で、共同研究の内容や地域交流イベントの告知・レポートなどの情報を発信したほか、食農コープ教育プログラムHP(<http://www.kobe-face.jp>)ではプログラムを受講する学生の声を発信した。

また学生たちがより日常的に連携センターの情報にふれることができるようfacebookとtwitter(@agregion)による情報発信も適宜おこなっている。



2) オフィスアワーの実施

地域と農学研究科を繋ぐ窓口として、情報の受発信を行い各種相談に答えるため毎週火曜日と水曜日にオフィスアワーを実施している。2013年1月1日から2013年12月31日までの1年間で、39件の相談があった。

最も利用が多いのは大学生・大学院生の相談で、その内容はインターンシップに関するもの10件、次いで学生生活団体から協力依頼が8件、授業に関する質問が3件、その他は地域の農業に関する活動についてのものであった。このようにオフィスアワーに、気軽

に学生が相談に立ち寄れる環境が整いつつある。



3) オープンキャンパスへの参加

2013年8月8日に実施された神戸大学農学部オープンキャンパスにおいて、「食農コープ教育」プログラムのブースを設置し、高校生や保護者に対し、カリキュラムや活動紹介のパネルを展示するだけでなく、地域連携研究員・現役大学生を配したカフェコーナーをもうけ、プログラムについて自由に話せる場を提供した。



組織体制

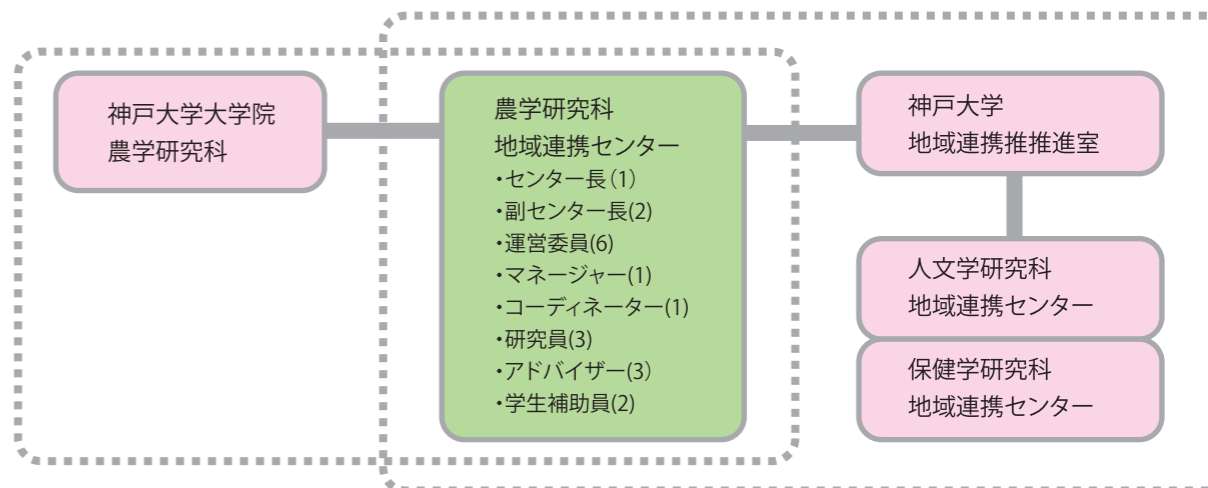
1) 名称

神戸大学大学院農学研究科地域連携センター

2) 組織

農学研究科(農学部)および神戸大学地域連携推進室の協力のもと、センター長と副センター長を中心に、運営委員会がボードの役割を果たし、教育研究ス

タッフ、事務スタッフ、学生ボランティア等が協働で事業を推進する。



3) 住所・連絡先

住 所 : 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 A103
 電話/FAX: 078-803-5939 (オフィスアワー: 火曜日・水曜日13時~16時)
 E m a i l : ans-chiiki@edu.kobe-u.ac.jp

4) H25 年度スタッフ

センター長	高田 理 (食料環境経済学 教授)
副センター長	杵本敏男(農環境生物学 教授) 中塚雅也(食料環境経済学 准教授)
運営委員	庄司浩一(生産環境工学 准教授)・中塚雅也(食料環境経済学 准教授)・原山洋(応用動物学 教授)・石井弘明(応用植物学 准教授) 藍原祥子(応用生命化学 助教)・杵本敏男(農環境生物学 教授)
マネージャー	中塚雅也(食料環境経済学 准教授)
地域連携コーディネーター	溝口尚子
地域連携研究員	鈴木曜・布施未恵子(篠山フィールドステーション)・野口陽平(篠山フィールドステーション)
相談役	加古敏之(神戸大学名誉教授) 伊藤一幸(応用植物学 教授) 内平隆之(兵庫県立大学環境人間学部 講師)
学生補助員	岡田文子(農環境生物学)・中塚万智(応用動物学)